
彼女の秘密

Mu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の秘密

【Nコード】

N8972D

【作者名】

Mu

【あらすじ】

僕は、彼女に告白し、ふたりは両思いだと思った。なのに、どうして彼女は、僕をさけるんだ？彼女の秘密を知ったとき、僕は……
高校生のちよつとエッチな、でも、純愛物語。春エロス2008参加作品です。

前編

僕はドキドキして立っていた。

目の前に女の子が小首を傾げながら、僕を見つめている。

それは、僕のあこがれの女の子だ。

腰まで届く、長い艶やかな髪。くっきりした目元。細くてかわいい眉。

つんとした綺麗な鼻筋と卵形の綺麗な輪郭。そして、透き通るような白い肌。

背はわりと高く、ほっそりとしているのにプロポーションはよくて、まるでどこかのお嬢様のような清楚な容姿をしている。

その少女は、僕の同級生で、同じ水泳部の仲間だ。

今、僕は、その少女に、告白しようとしていた。

高校入学から、早四ヶ月。もうすぐ夏休みが始まる。

その前に、自分の気持ちを彼女に伝えたかった。彼女を好きな気持ち伝えたかった。

そして、できれば、恋人になれたらいいなあと……。

高校入学で僕らは同じクラスになった。

僕は、一目で彼女のことを気になった。

綺麗でかわいくて、そこにいるだけで花が咲いているようにみえた。

控えめで、普段は言動で目だったりしないけれど、誰かとおしゃべりしながら、笑っている表情は、僕の胸にドキドキする気持ちをもたらした。

驚いたことに、そんな彼女と同じクラブに入っていた。それは、全くの偶然。

僕が水泳部に入部したときには、彼女もいたんだ。

その偶然が、どんなに嬉しかったか。

僕は、いつの間にかよく話すようになっていた。

話題は、クラブのこととか、勉強のこととか、友達のこととか、そんなたわいもないこと。

そんなとき、僕の冗談に口元をほころばせて楽しそうに笑う彼女を見ていて、僕は、はつきりと、自分の気持ちに気づいた。

彼女のが好きだ。もっと、彼女と一緒にいたい。

だから、僕は彼女を呼びだした。

クラブが終わった後の、プール場の裏手。

「話があるんだけど……」

僕の言葉に、彼女は、素直についてきてくれた。

そして僕は、目の前の彼女を見つめながら、ドキドキする胸の鼓動を押さえて話し出した。

「あの……」

「うん、なに？」

彼女が小首を傾げる。その仕草が、たまらなくかわいい。

あ、いや、今は、それより……

「えっと、聞いて。僕は、その、君のことが……」

「わたし？」

僕は、思い切って告げた。

「好きです。とっても、好きです」

なにも2度も言わなくても、と自分で思う。とっても恥ずかしい。

その言葉に、彼女は、しばらくキョトンとした顔をしていた。

僕の胸が痛くなってくる。

彼女は、僕のことどう思ってるんだろう？ たぶん、嫌われてないとは思っけど。

でも、何とも思っていないとか？ それはあるかも？

ああ、そしたら、ダメかな？ 告白しない方がよかったかな？

でも、でも……。

なんだかどんどん弱気になってきた。彼女の沈黙が胸にいたい。もう、どうでもいいから、早くなんか、言ってくれよ。そんなふうに思った。

それは、そんな長い時間でなかったかもしれない、でも、僕にはじりじりするほどの時間だった。

彼女は、驚いた表情をおさめると、僕に言った。

「ほんとに？　ほんとに、わたしのことを好きになってくれたの？」
その表情が、少し照れたように赤く染まってくる。

「うん。そうだよ」

「う、嬉しい！」

目の前で、彼女が両手を頬に当ててそう言った。

嬉しい？　それって、僕が好きでよかったと言うこと？

彼女も、僕のこと好きでいてくれた？

僕は期待で胸が震えた。

「君も、僕を好きでいてくれたの？」

彼女は、はにかんだ表情で、

「……うん」

と小さく答えてくれた。

やったあ！

僕は天にも昇る気持ちになった。

両思いだった！　彼女と！　やった！

小さくガッツポーズまでしてしまう。それから僕は早口で言った。

「じゃあ、あの、付き合ってくれる？」

当然、はいと言ってくれると思った。だって、好き合ってるんだから。

でも、その時急に、彼女は、ハツとしたような表情をして、その顔が曇った。そして、

「あ、あの……ご、ごめんなさい」

「え？」

「わたし、あなたと付き合えない」

何を言われてるのか、理解できなかった。だって、さっき、好きだって……。

「ほんとに、ご、ごめんなさい」

彼女は、ちよつと頭を下げると、逃げるように僕の前から走り去った。

「あつ！」

僕は追いかけることもできなかった。

何がなんだかわからなくて、それさえも考えられなかったんだ。

いったい、どういうことなんだろう？

彼女は、確かに、僕のことを好きだと言ってくれた。

それなのに、付き合おうと言ったとたん、逃げるように帰ってしまった。

なにか、気にさわることも言ってしまったのか？ 僕の態度が気に入らなかったのか？

なんだかわからないけれど、彼女を怒らせてしまったのなら、謝ろう。謝って、もう一度、彼女に僕の気持ちを聞いてもらおう。

そう思って、翌日学校に行った。

教室で彼女を見つけて、話しかけようとした。

ところが、僕が近づくより前に、彼女は、すつと、席を立ってどこかにいってしまふ。

ああ、仕方ない。また、後で話しかけよう。そう思った。

ところが、そんなことが、何回も続いた。

これは……避けられてる。やっぱり、嫌われたのかな？
なんだか、落ち込んできた。

うーん。でも、とにかく聞いてもらわなきゃ。僕はそう思った。

でも、彼女には完璧に避けられていて、教室でも、機会があるだろうと期待したクラブでも、彼女をつかまえることは出来なかった。

そんなことが、何日も続いた。

相変わらず、僕は彼女に避けられていた。

最初は、そんなにひどく嫌われたんだと落ち込んだ。

でも、時々、僕が見ていないときに、彼女が僕を見ていることに気づいた。

僕が偶然振り返って彼女を見たときなど、彼女は慌ててそっぽを向くのだ。

その頬がなんだかちよつと赤く染まって見えた。

それは、僕が嫌いだからという態度には、見えなかった。

じゃあ、どうして、避けられてるんだろう？

僕は、あらためてそう思った。

もし、彼女があの時言ったように、僕のことを好きでいてくれるのなら、なぜ、付き合えないって言うんだろう？

たとえば……。

僕の他にも好きな人がいて、二股かけるのがイヤだとか？ ……

いや、彼女が、そんなことするとは思えない。

それなら、無理矢理、誰かの彼女にさせられていて、それで僕と付き合えないとか？ 脅されたりしてるのかもしれない。

僕の想像は、だんだん過激になっていく。

もしかしたら、彼女の家借金があつて、それで、やばいところで働かされていて、それを知られるのがイヤだからとか？ 放課後はいつも身柄を拘束されてるとか？

そんな、あぶない小説だかドラマのようなことまで考えてしまうでも、そんなことを考えながら、一つだけわかったことがあつた。もし、彼女がなにかの理由で、困っているのなら、僕がなんとかしてあげたい。

彼女が僕のことを好きでも好きじゃなくても、僕は、彼女が好き

なんだから、彼女の心配を無くしてあげたい。
僕はそう心に決めた。

明日から夏休みという一学期の終業式の日。

僕は、相変わらず避けられている彼女に、なんとか先回りしようとした。

ホームルームが終わると同時にそそくさと飛び出した彼女の後を、周りも省みずに、追いかけた。

廊下を突っ切り階段を飛び降りて、下駄箱の前で、走るように逃げ去る彼女の腕を掴んだ。

彼女が驚いたように振り返る。その頬が少し赤い。

「どうしても、君と話がしたい！　お願い、逃げないで！」

僕は彼女の腕を掴みながら、頭を下げた。彼女の腕の震えが伝わってくる。

「……どうして？」

久しぶりに聞く、彼女の声。僕の胸が熱くなった。

顔をあげてみた彼女の表情は、困惑に彩られている。でも、僕は言った。

「君が僕を避けてるのは、わかってる。僕のことを嫌いになったのかもしれない。でも、お願いだから、理由を教えてくれ！　頼むよ！」

彼女の視線が揺れて、表情が苦しそうに変わる。

「……ち、違うの。あなたを嫌いになったわけじゃないよ」

「じゃあ、なんで？　もし、他にもっと好きなやつがいるんなら、はつきり言って。僕はあきらめる」

「違う。違う」

彼女が首を激しく振った。

「それとも、誰かに脅されてる？　なんか、困った事情がある？　それなら、僕は、君を守りたい。だから、教えてくれ！」

彼女は、僕のそんな捨て身の言葉を聞いて、しばらく震えながら俯いていた。

それから、顔をあげると、静かな声で僕に言った。

「……付いてきてくれる？」

「え？」

「ふたりだけのところで、話したい」

「……うん」

そうして、僕は、屋上に向かった。

後編

終業式の午後の屋上には誰もいなかった。

夏の空が、青くひろがって、白い雲が気持ちよさそうに浮かんでいる。

校庭で活動する運動部の掛け声が、小さく聞こえていた。

彼女は、屋上を先に進んでいくと、金網の柵の手前で立ち止まって、僕の方を振り返った。

その表情が思い詰めたように見えた。

僕はさらに近づこうとして、

「そこで、止まって」

という彼女の言葉で立ち止まった。

彼女まで、まだ2メートルぐらい離れている。大切な話をするには、ちょっと遠い気がした。

「ここで？」

「うん。そこで」

でも、彼女にそう言われたら、動けなかった。

彼女は、なんだか震えているようで、見ていて苦しくなってくる。

「あの……大丈夫？」

「う、うん。大丈夫」

とても、そうは見えなかった。

こんなに苦しそうなのに、無理に言わせることはないのかな？
そんな気がしてくる。

彼女をこんな苦しくさせるぐらいなら、僕が我慢すればいいことだ。これじゃ、本末転倒だ。

「あの、もう……」

言わなくて、いいよ。と言おうとしたとき、彼女が言った。

「お願い、聞いて。わたしのことを、見て」

そう言って、彼女が僕を見つめた。その瞳がはつきりと決意を告げている。

「わたしのほんとうのことを、教えるわ。わたしが、あなたと付き合えない理由。だから、見て」

彼女の言い方が少し引つかかる。

ほんとうのことを、“見”て？ 何を、見るんだ？

そう思う僕の前で、彼女が両手で自分のスカートの裾を掴んだ。綺麗な腿が覗くミニのスカート。その裾を、彼女がそろそろ引き上げていく。

「え？」

なにを？ と思った。 なにをしてるんだ、彼女は？

そんな事したら、スカートの中が見えちゃうじゃないか？ 子供のスカートめくりじゃないんだから……。

僕は、ドキドキして、目を逸らした。

でも、彼女の顔を見ると、恥ずかしいからか、僕から視線を外し、真っ赤な頬をしながら、それでも唇をかみしめている。

その表情が、僕によっぽどの覚悟だとわからせる。

そんなに彼女が覚悟してるのなら、ちゃんと見なきゃ。

僕は再びそろそろとあがっていくスカートの中を見た。

なんだろう？ なにがあるんだろう？

もしかして、事故とかで、大きな傷跡があるのかな？

それとも、火傷の痕がひどいとか？

もっと単純に大きな痣があって、それが恥ずかしいからとか？

えっと、なんだろう？

次第に露わになっていく彼女の太腿の奥に、僕はドキドキしながら、でも目を逸らさずにいた。

白い腿が眼にいたい。

もうすぐ、パンティーが見えちゃうんじゃないかと思って、さす

がに目を逸らしたくなつた。

でも、その時……逆に、視線を逸らせなくなつた。

僕の視線の先に、彼女の綺麗な下腹が見えていた。

白い腿の上、股の間には、黒い茂みが露わになっている。

彼女は……パンティーを着けていなかった。

え？ え？ なんだ？ どうして、彼女が、こんな？

頭が混乱して、思わず口から、言葉がでた。

「どうして、はいてないんだ？」

彼女が、ビクツと体を震わした。

あ、しまった。そんなこと、口に出すんじゃない。

彼女の顔は、ビククリするほど赤く染まっている。

きつと死ぬほど恥ずかしいんだ。

それで、思い当たる。

きつと誰かにやらされてるんだ！

彼女に、こんな、恥ずかしいことさせるなんて、いったい誰だ？！

怒りの感情が湧きだした。

「もういい！ もういいから、スカート下げて！ 君に、こんな事させるやつ、僕が許さない！」

僕がそう言つと、彼女は、視線を僕に向けて、真っ赤に染まった顔で言つた。

「うつん。そうじゃないの。そうじゃない！」

「え？」

彼女の答えがわからなかった。

そうじゃないって、どういうことだ？

その間も、彼女はスカートを降ろそうとしない。彼女のあそこが僕には丸見えだった。

「違うの。誰かにやらされてるわけじゃないの」

「でも、そんなに恥ずかしそうで……」

「うん。そうなの。恥ずかしい。恥ずかしいけど、わたし……これ

が、好きなの」

震える声で、彼女はそう言った。

僕は、呆氣にとられて声も出なかった。

これが好き？ 恥ずかしいけれど。恥ずかしいから？ 好き？

それって……

「そう。そうなの。わたし、露出好きなの。こんな格好で、学校にきてるの。こんな格好が、気持ち良いの。だから……」

彼女の体が小刻みに揺れていた。顔が上気して、息が苦しそうだつた。

「……あなたと付き合うことなんか出来ない。こんなわたし、あなたは嫌いになっちゃう！ こんな、変態なわたし……」

そこまで言つて、彼女がいきなりがくつと膝を折った。そのまま倒れそうに傾いた。

僕は慌てて彼女に駆け寄る。

無我夢中で彼女の背中に腕をまわした。

そのままなんとか座り込んで倒れる彼女を受け止める。

僕の両腕の中に、彼女の柔らかい体が横たわった。

「あつ、あうつ、ううん」

腕の中で彼女が何度か動いた。まるで小さく痙攣しているみたいだった。

彼女のスカートが捲れ上がったままになっていて、彼女の茂みと白いその部分が、間近に見えた。

うわあ、と思って、慌てて手でスカートの裾を下ろした。

腕の中でようやく彼女が眼を開けた。

真っ赤な顔はそのまま、ハア、ハア、と息をする度に、腕の中で彼女の胸が上下した。

「えっと、あの……だ、大丈夫？」

僕の言葉に、彼女は一瞬僕を見て、それから顔を横向けた。そし

て言う。

「あ、ありがとう。抱えてくれて。でも……わたしのこと、嫌いになっちゃったよね。こんなわたしのこと……」

僕は、なんていったらいいのかわからなかった。

あまり突然のことに、頭が回らない。

「わたし、わたし、イツちゃった。あなたに見られて、イツちゃったの。は、恥ずかしい……」

彼女は頬に手を当てて顔を隠した。

「こ、こんな恥ずかしい子、こんな、変態、イヤだよね？」
そう言って、肩をふるわせた。

僕は、彼女の体を抱えながら、思った。

あんまり突然で、あんまり驚きで、すぐにはよくわからなかったけど、これって、僕が思っていたことと比べて、どうなんだろう？

彼女は、僕以外の誰かを好きだったわけじゃなかった。

誰かに無理矢理脅されてるわけでもなかった。

まして、借金の形で困ってるわけでもない。

それに、なにより、彼女は、僕のことを好きだと言ってくれてる。

それ以上に、大切なことがあるか？

そりゃあ、彼女のこと、ちよつと驚いたけど……今も、驚いてるけど、でも、僕は……。

僕は顔を覆って腕の中で震えている彼女に声を掛けた。

「あのさ、僕は、君が好きだよ」

「え？」

被っていた手はずして、彼女が僕を見た。その瞳に光るものが浮かんでいる。

「でも、でも、もう……」

「うつん。嫌いになんかなってない。君のことが、好き」

「でも、だって、わたし、こんななのに……」

「関係ないよ。そりゃあ、ちよつと、ビックリしたけどさ」

「いいの？　こんなわたしで、いいの？」

「もちろんだよ。それに……」

僕は、ちよつと恥ずかしくなる。

「好きな女の子がエッチなのを、男がイヤなわけじゃないか！」

僕の頬が恥ずかしさで熱くなった。彼女の瞳から涙の雫が落ちる。

「……嬉しい！」

彼女は突然僕の背中に腕をまわし、僕を引っ張った。

僕の唇が彼女のそれでふさがれる。

それは僕の初めてのキス。女の子とのファーストキス。

それが、こんなに甘いものなんて、僕は初めて知った。

*

*

そのあとの、彼女との露出の数々や、初体験は、またいつか話そう。

僕らはふたりとも、あのころよりずっと好きになった。身も心も一緒になったんだ。

ねえ、君、愛してるよ。

これからもずっと、ドキドキしようね。

おわり

後編（後書き）

春エロス2008企画で

『18禁ぎりぎりのエロスを！』

ということでしたが……すみません、力不足です。
でも、わたしには、これがぎりぎり（笑）

春エロス企画終了しました。

読んでいただいた方、投票していただいた方、ありがとうございました。
いました。

続編を書きました。

『彼女の秘密2』です

よろしかったら、読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8972d/>

彼女の秘密

2010年10月8日14時38分発行